益田養護学校建設に伴う
大畑遺跡発掘調査報告

1999

県教育委員会

例　　言

1．本書は島根県教育委員会が平成10年度に行った島根県立益田養護学校建設事業に伴う大畑遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査主体は、島根県教育委員会である。
3．発掘調査は、島根県教育庁総務課施設管理室、益田市教育委員会、益田市土地開発公社の協力を得て、島根県教育庁文化財課文化財保護主事柳浦俊一が担当した。
4．出土遺物、写真等は、島根県埋蔵文化財調査センターに保管している。
5．本書の執筆・編集は柳浦が行った。

目　　次

1．調査に至る経緯……1
2．遺跡の位置と試掘調査の結果……1
3．調査の概要……1
4．出土遺物……5
5．まとめ……7

挿図目次

第1図　遺跡周辺の地形……2
第2図　調査区配置図……3
第3図　土層堆積の状況……4
第4図　出土遺物（1）……6
第5図　出土遺物（2）……7
第6図　出土遺物（3）……8

図版目次

図版1　遺跡周辺の地形
図版2（上）　遺跡近景
図版2（下）　1区完掘状況
図版3（上）　3区完掘状況
図版3（下）　土層堆積状況
図版4　出土遺物
図版5　出土遺物
図版6　出土遺物

1．調査に至る経緯

島根県教育委員会は教育の機会均等の確保の観点から、それまで特殊教育学校が設置されていなかった益田地区に県立養護学校を新設することとなり、平成12年度の開校を目指してきた。平成９年度、建設予定地が益田市横田地区に決定されたが、ここは隣接して安富王子台遺跡、羽場遺跡が存在することから、遺跡の存在が予想された。そのため試掘が必要と判断し、平成10年１月益田市教育委員会が試掘調査を行うこととなった。その結果、中世の陶磁器を中心として遺物が出土し、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は島根県教育委員会が平成10年９月に実施した。

2．遺跡の位置と試掘調査の結果

益田市横田町は島根県の西部を流れる１級河川高津川の下流に位置する。遺跡の周辺一帯は高津川が作り出した沖積平野で、石見部最大の面積をもつ平野である。調査地に隣接する安富地区は一段高い河岸段丘で、県内有数の縄文時代遺跡として古くから知られた安富王子台遺跡が存在している。また、この地区南部には弥生時代の環濠集落が確認された羽場遺跡があり、石見部の弥生時代の拠点集落として注目されている。また、羽場遺跡では古代の硯・緑釉陶器や中世の輸入陶磁器などがまとまって出土しており、古代から中世前半の豪族居館跡の可能性が高い。

試掘調査は造成予定地内に３ｍ×３ｍのグリットを29ヵ所設定しておこなった。遺構は確認されなかったが、各グリットで遺物が出土した。地山は砂礫層で、北部では地表面から約１～1.3ｍの深さで検出されたが、南部では地表下40～60㎝の比較的浅いところで検出された。このことから、造成地の南部は高津川やその小支流による氾濫原と考えられた。

出土した遺物は、弥生土器、須恵器、中世輸入陶磁器、中世土師質土器である。ほとんどは中世の陶磁器、土師質土器等で、古代以前の土器は弥生土器片、須恵器小片がごくわずか出土するにすぎなかった。弥生土器片、須恵器片はいずれも摩滅が著しく、遠隔地からの流れ込みによるものと考えられた。中世関係の遺物は多く、同時期である羽場遺跡との関係が注目された。

北端部分では遺物は出土しなかった。ここでは有機質を含む黒色土層が東西に分布していることから、ある時期湿地帯であった可能性が高い。

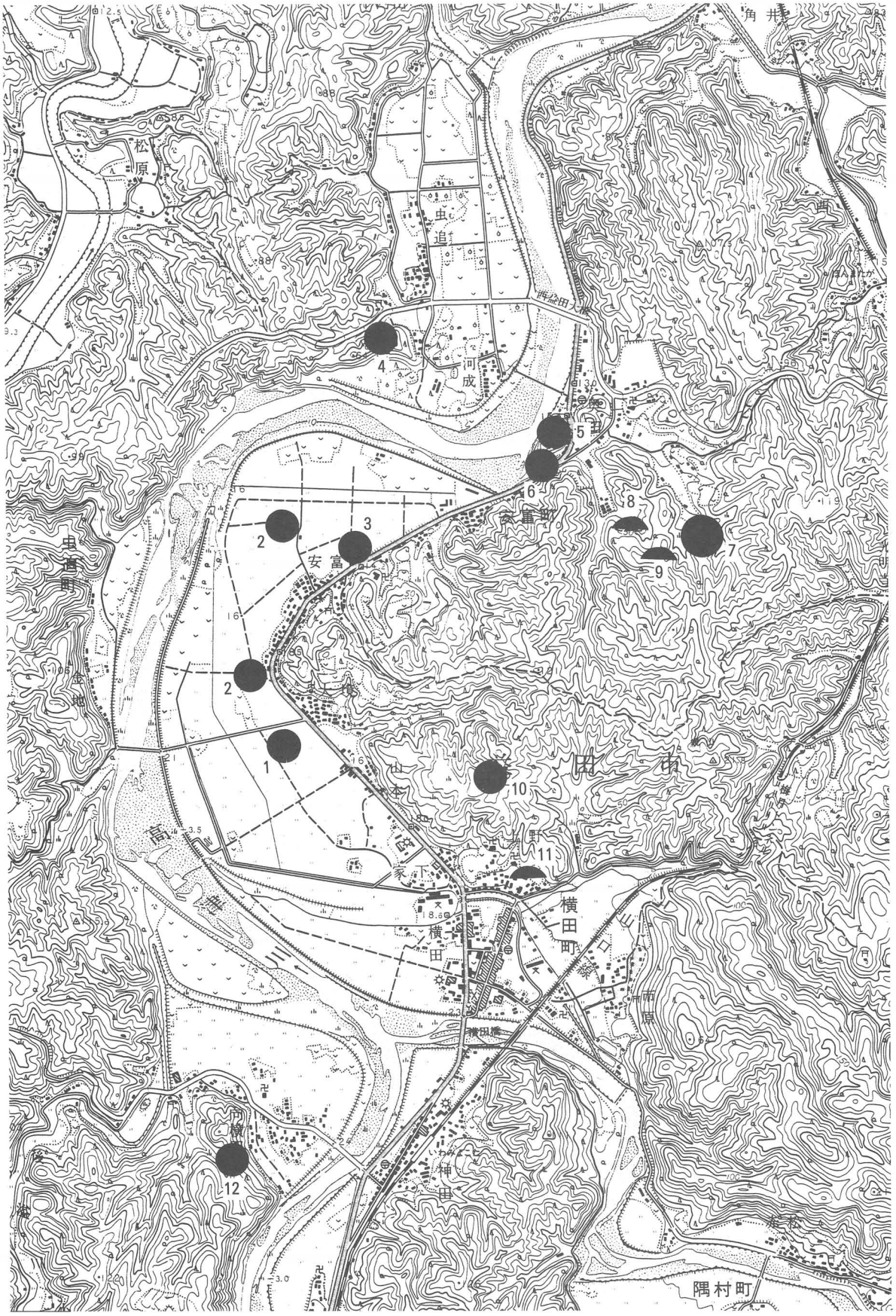
以上の試掘結果から、発掘調査は造成地の北部を中心に行うこととなった。

3．調査の概要

発掘調査は、試掘結果をもとに建物建設部分について実施した。試掘では遺物の包含にかなりの粗密がみられたため、まず建物の壁に沿ってトレンチを入れ、遺物の分布状況の把握に努めた。

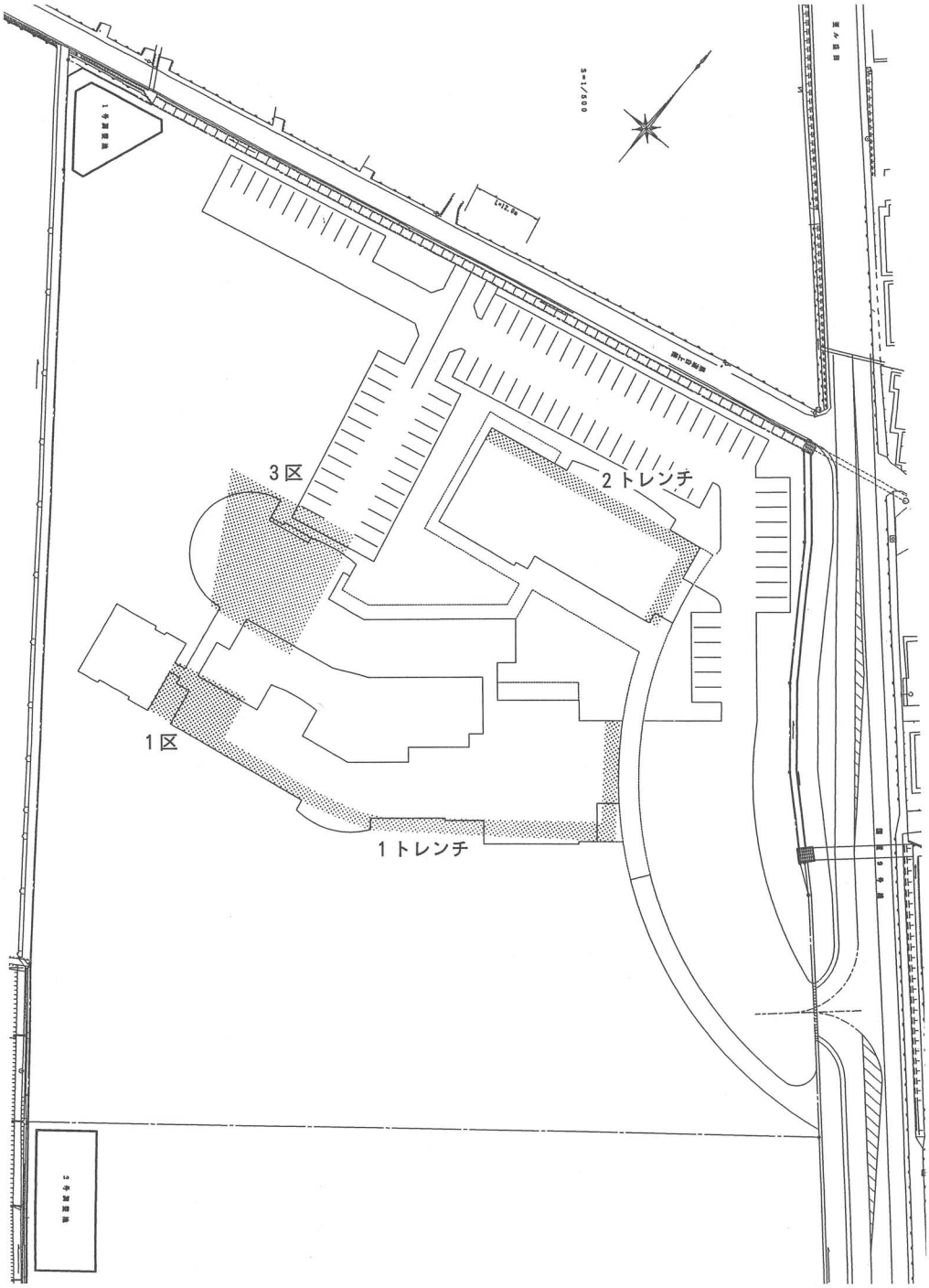
その結果、調査地では遺構は確認されなかったが、中世遺物を含む層が確認された。土層は基本的に上から①耕作土、②茶色土、③黄色土、④砂礫層の順に堆積している。このうち、遺物が顕著に包含されるのは②茶色土である。

地山はやはり④砂礫層で、１Ｔでは西端から東に向かうにしたがって次第に低くなり、中ほどで



第１図　周辺の地形と遺跡（国土地理院石見横田 25,000分の１）

1．大畑　2．安富王子台　3．羽場　4．大嶽城跡　5．安富城跡　6．鷲王子　7．長者原屋敷跡
8．奥谷古墳群　9．奥谷丸山古墳　10．豊田城跡　11．上野横穴　12．向横田城跡

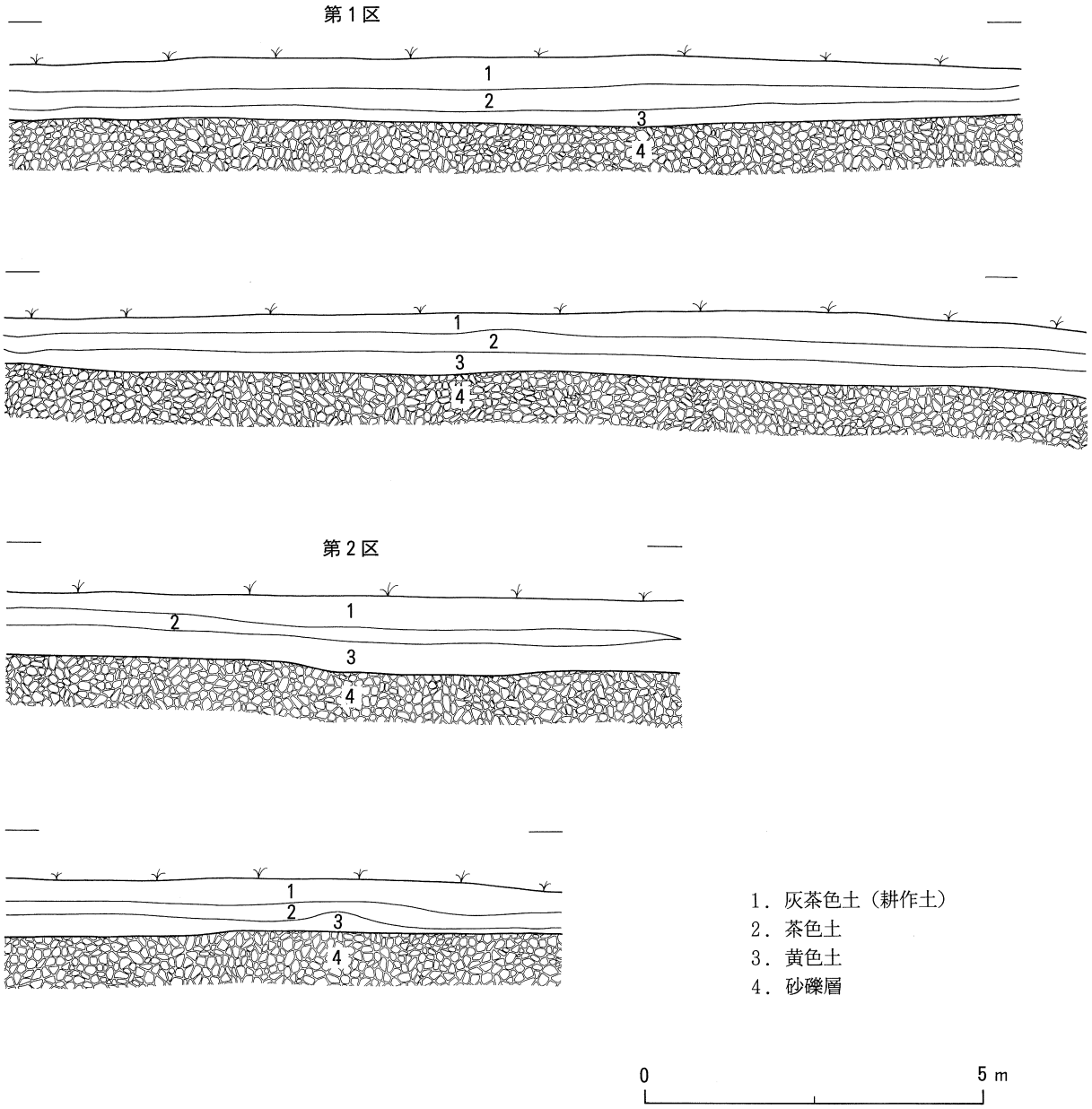


第２図　調査区配置図

もっとも低くなっていた。東側は再び高くなり、東端部では再度低くなる。地山は１Ｔ東端近くでもっとも高く、地表面からの深さは約30㎝ほどであった。

２Ｔでは地山は東が高く、西に向かって低くなる地形であった。上記の層序のほか、細砂層や灰色粘質土などが厚く堆積しており、試掘結果のとおり造成予定地の北端部分はある時期には沼地などの湿地帯だった可能性が考えられた。

遺物包含層は１Ｔ西端部を中心に分布し、東に向かうにしたがってしだいに薄くなっていた。主



第3図　土層堆積の状況

に②茶色土から遺物が多く出土するが、一部③黄色土からも出土した。なお、③黄色土上面では遺構の存在が予想されたが、柱穴等の遺構は確認できなかった。

以上のトレンチの状況から、遺物包含層の中心は特別教室・ランチルームおよび教室・管理棟の西端部に限定することができた。前者を1区、後者を3区とし、②茶色土を中心に合わせて約500㎡を調査した。出土遺物は中国製の白磁、青磁、中世土師器など、中世の遺物が大多数であった。これらはほとんどが小片であったが、陶器壷と石鍋は完形に近く復元できた。

中世関係の遺物は、小片が多いとはいえ、著しく摩滅したものではない。包含層の堆積が比較的安定しているように思われたことから、おそらくこの周辺に氾濫原上に微高地が形成され、その上に中世集落があったのではなかろうか。

4．出土遺物

第４図１は弥生土器である。脚付きの器種であるが、脚高は低く高坏ではないと思われる。全面ナデ調整が施され、脚端径８㎝を測る。

同図２・３は中世の土師器小皿である。器高0.9～1.3㎝と非常に浅く、口縁部のたちあがりがきわめて短い。底部は回転糸切りにより切り離され、内面は凹凸が著しい。器壁は３は約３㎜非常に薄いが、２の底部は厚く作られている。

同図４～８は土師器坏である。復元できるものは口径14㎝前後、底径８㎝前後、器高４㎝を測る。４は口縁部が内湾してたちあがるが、他は直線的に外傾する口縁である。図示できなかったものも含め、後者が圧倒的に多い。底部はいずれも回転糸切りによっている。５の内面にはラセン状に凹線がめぐっている。

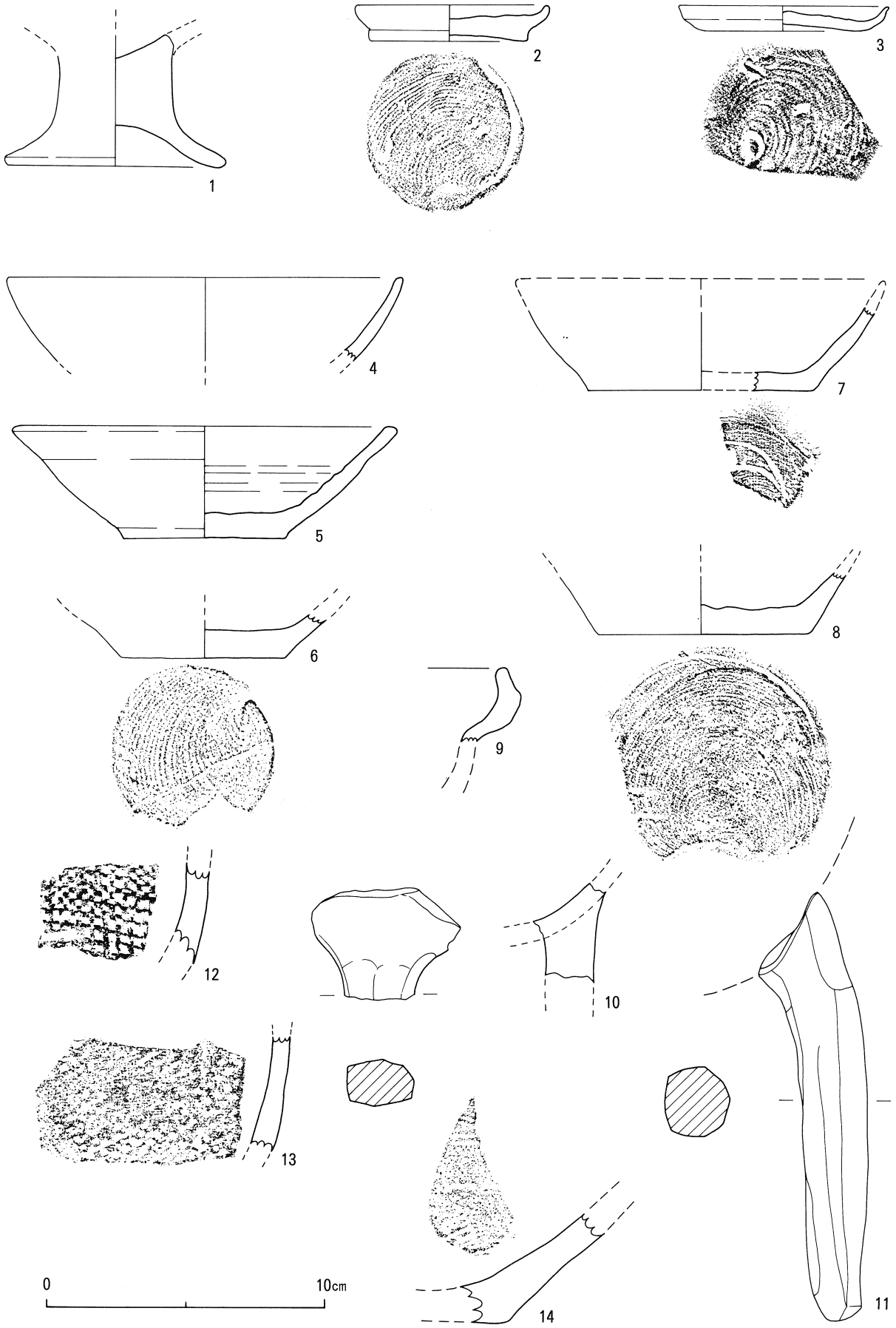
第４図９～11は土師質の脚付き鍋である。９は口縁部で、外面にはススが厚く付着している。外面は太い突帯状に凹凸があり、下部は屈曲して胴部にいたると思われる。内面にヨコナデ調整が観察される。10と11は脚で、いずれもケズリ後ナデ調整が施されているが、器面にはケズリによる面がよく残り、断面形は多角形である。10の鍋部内面は刷毛目調整後、ナデ調整が施される。11の上端には鍋部との剥離痕が明瞭に残る。11は脚長15.3㎝、径2.4㎝を測る。

第４図14、第６図27は瓦質の摺鉢である。外面はともに荒れるが27が縦方向の刷毛目、14は小さな格子目の叩き痕が観察できる。内面は27が横方向の刷毛目後縦方向の刷毛目、14が横方向の刷毛目後ナデ調整が施される。27はおおよその底径は８㎝を測る。27は防長系の摺鉢と考えられる。

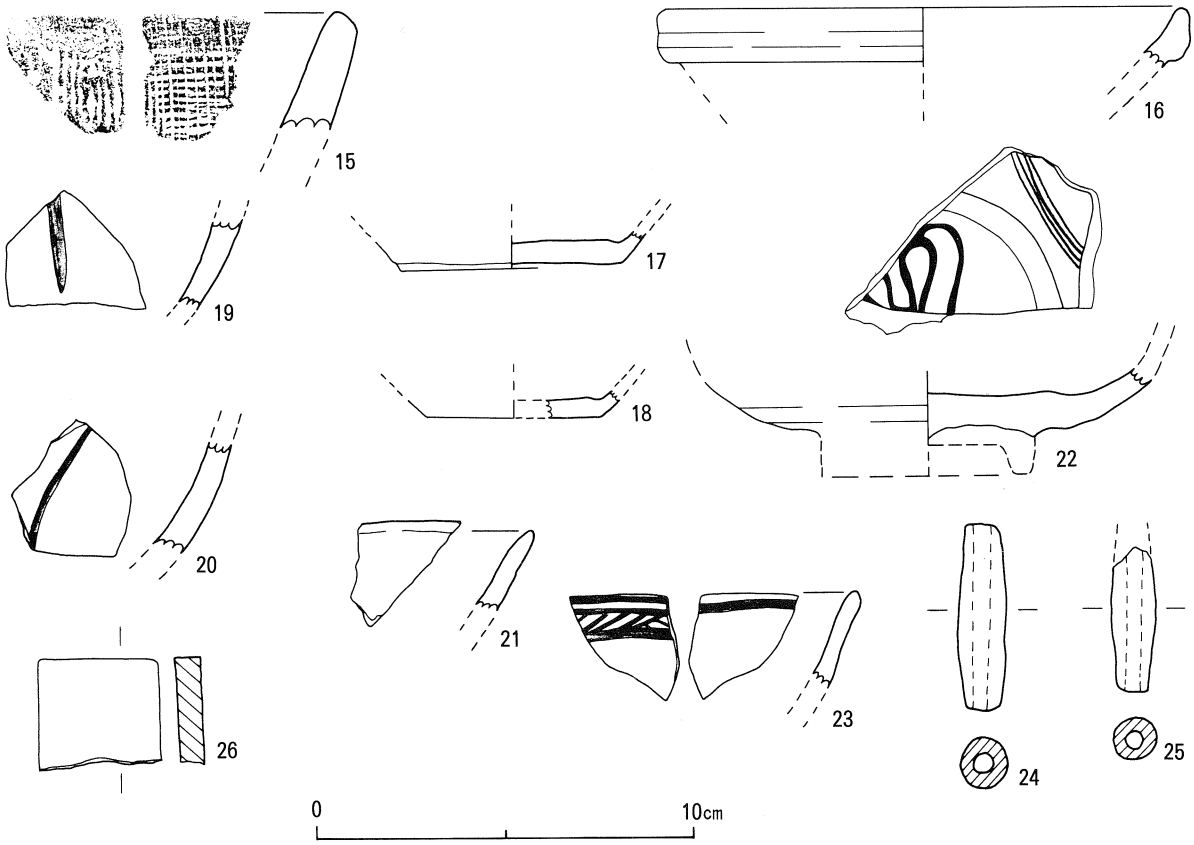
第４図12・13・第５図15は土師質の破片である。いずれも小片のため器種は不明であるが、鉢または壷など中型の器種と思われる。これらは土師質ではあるが、皿、坏脚付き鍋などと違い、砂粒を含んでいるものの胎土はきめ細かな印象をもつ。とくに15は砂粒を含まず、均質な胎土である。12と13の外面は一辺約３㎜の小さな方形叩き痕、内面にナデ調整が施されている。15は口縁部で、直口であろうか。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向→縦方向の順で刷毛目が施される。12と13は赤褐色、15は黄褐色を呈す。12と13は２次焼成を受けた可能性がある。

第６図28・29は陶器壷である。ともに口縁端部は短く外反し、肩の張る器形である。完形に復元できた29は口径11.8㎝、高さ24.4㎝、底径14.8㎝を測る、平底でやや寸詰まりの器形である。胴部内面には刷毛目、外面には刷毛目後回転ナデ調整が施される。底部付近は指による押圧痕が巡っている。口縁部から肩部にかけては黄緑色の釉がかかるが、これは自然釉と思われる。28は29に似た器形だが、口縁端部はやや厚くなり、内面は凹線状にくぼんでいる。内外面とも刷毛目後ナデ調整が施されている。外面には赤茶褐色の釉がかけられている。この陶器は胎土に白色の均一な砂粒が混入されているのが特徴である。両者ともに産地は不明である。

第５図17・18は白磁皿、16は白磁碗である。16・18は内外面に釉がかかるが、17の底部外面は釉はかかっていない。ともに内面の口縁と底部の境には段が付いている。16は玉縁状の口縁である。16が12世紀代、17・18が13世紀前半代と思われる。第５図19～22は龍泉窯系の青磁である。19・20には蓮弁、22の底部内面には花びら様の文様がみられる。21・22は12世紀後半、19・20は13世紀前半と思われる。



第４図　出土遺物(1)



第５図　出土遺物(2)

第５図23は肥前系の磁器である。２次焼成を受けており、文様は不鮮明である。近世の遺物はこれのみで、上層からの混入かもしれない。

第６図30は西北九州産の滑石製石鍋である。口径25cm、底径12.8cmを測り、高さはおおむね10cm程度と考えられる。外面は焼けており、ススが厚く付着している。内面は非常に滑らかで、縦横に擦痕が観察されるが、これが調整痕か使用痕かは不明である。13世紀代と思われる。

第５図24・25は土師質の管状土錘である。長さ５cm、最大径1.3cm、孔径0.6cmを測る。

第５図26は器種不明の石製品である。平面形は3.2×2.9cmの方形で、厚さは0.6cmを測る。表面は各面とも滑らかであるが、研磨痕は側面にわずかに観察される程度で、各面すべてが研磨されているかどうかは不明である。石帯などの未製品かもしれない。

5．まとめ

以上のように、大畑遺跡は12世紀から13世紀にかけての遺跡であることが判明した。遺跡は高津川によって形成された安富平野の中央に立地し、当初は高津川の氾濫による再堆積の遺跡とも思われた。しかし調査の結果は包含層が比較的安定していることがわかり、出土した遺物は遠隔地からの流れ込みとは考えられない状況であった。おそらく、中世段階では氾濫原を基盤としてその上に中洲状に微高地が形成され、そこに集落が営まれていたと思われる。今回の調査では遺構は確認できなかったが、近隣に何らかの中世の遺構が存在する可能性はきわめて高いと思われる。

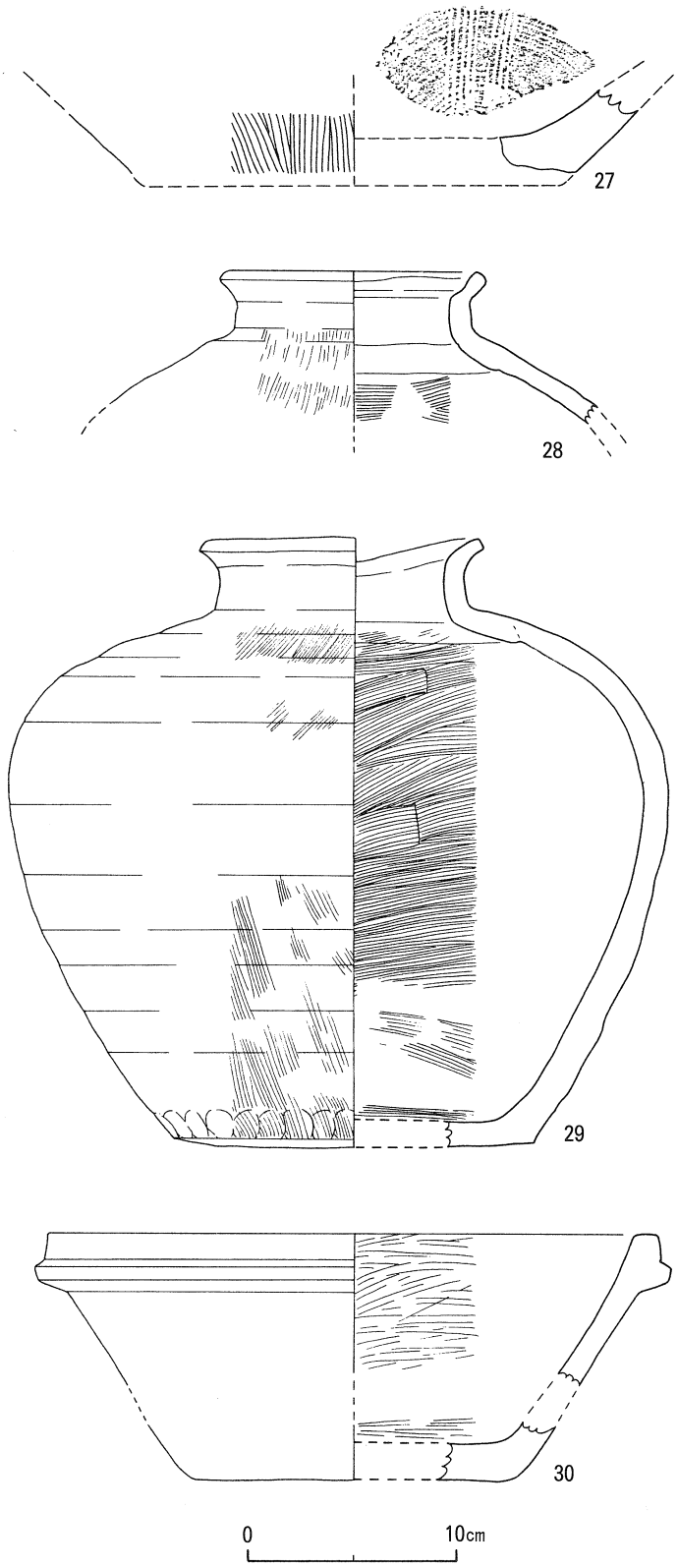
周辺遺跡との関連では、同時期の遺物が大量に出土した羽場遺跡との関連が注目される。羽場遺跡では大量の中世輸入陶磁器が出土しており、中世豪族の居館の可能性が高い。羽場遺跡の中世陶

磁器は12世紀から14世紀とされる。本遺跡の陶磁器は12世紀から13世紀代に限られることから、羽場遺跡と前半期は同時に存在しており、本遺跡は羽場遺跡より早く終息した遺跡と考えることができる。これが正しいとすれば、本遺跡と羽場遺跡は有機的に関係を持ちつつ併存していたことがうかがえ、何らかの事情で本遺跡が早く消滅したと推定される。

12世紀は中世石見を代表する益田氏が益田地域に移住してきた時期といわれ、東部を中心に益田氏関連の遺跡が確認されている。大畑遺跡や羽場遺跡などの横田地区の遺跡が益田氏との関係で成立したとも考えられるが、一方では益田氏移住当初は横田地区には別の豪族の所領であった可能性も否定できないように思われる。今後、中世前半の石見を考える上で益田地区に加え、横田地区の遺跡も併せて検討する必要があろう。

参　考

木原光「益田市・羽場遺跡出土の陶磁器」『松江考古第８号』1992　松江考古学談話会



第６図　出土遺物(3)

出土遺物一覧表

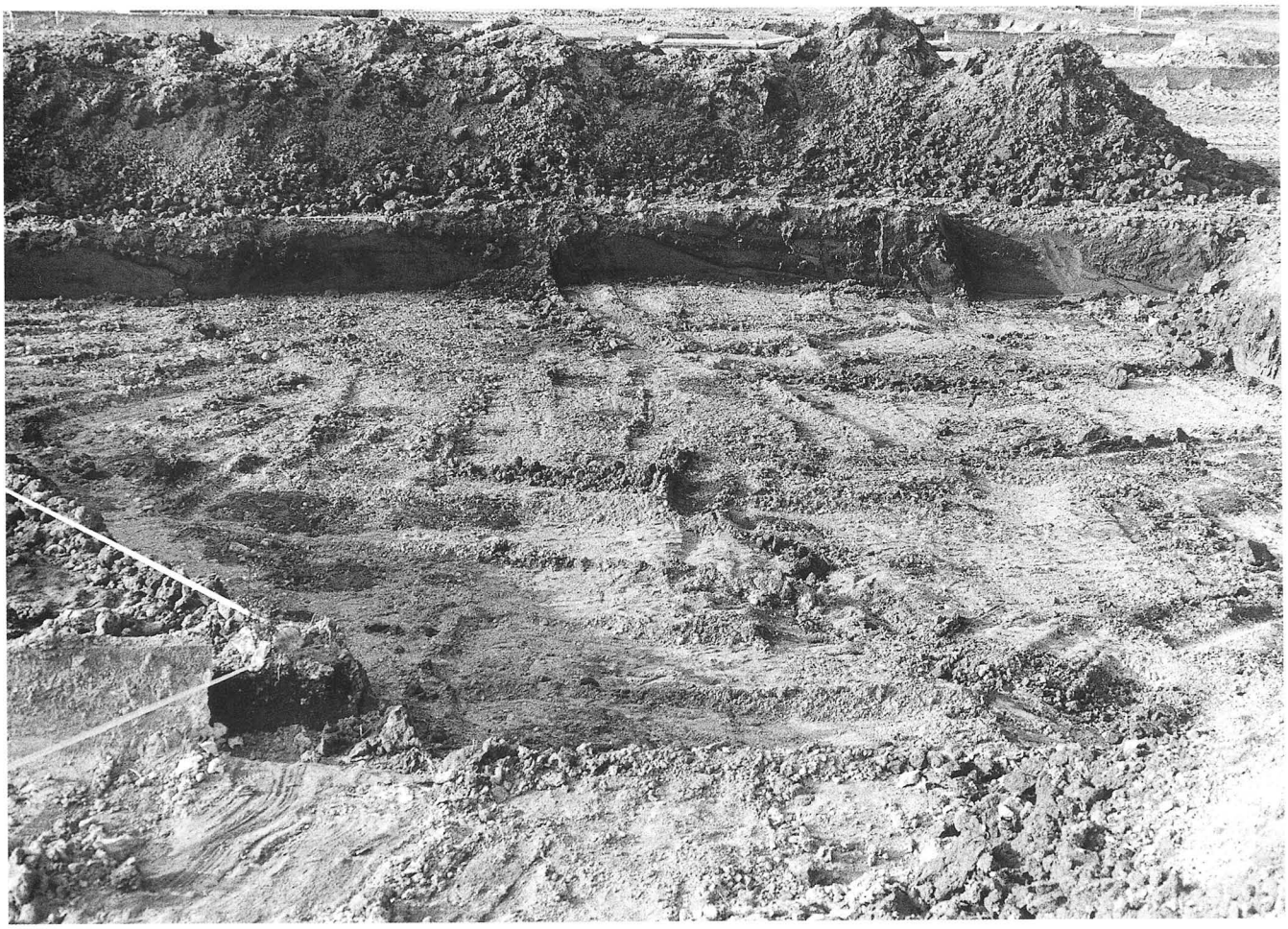
挿図番号	器種	法量（cm）			形態など	調整その他	備考
		口径	底径	高さ			
1	脚部		8		脚端部広がる。筒部は空洞ではない。	ナデ	弥生土器
2	皿	6.8	5.6	1.3	口縁短く内湾。	回転ナデ。底部回転糸切り。	土師質土器
3	皿	7.6	5.6	0.9	口縁短く内湾。器壁薄い。	回転ナデ。底部回転糸切り。	土師質土器
4	杯	14.2			口縁部内湾。	回転ナデ。	土師質土器
5	杯	14	5.8	4	口縁外傾。端部やや厚い。内面ラセン状に凹線。	回転ナデ。回転糸切りか？	土師質土器
6	杯		6			回転ナデ。回転糸切り。	土師質土器
7	杯		8		口縁外傾。	回転ナデ。回転糸切り。	土師質土器
8	杯		7.4			回転糸切り。	土師質土器
9	鍋				頸部屈曲。口縁部は突帯状に肥厚。		土師質。外面スス付着。
10	鍋				脚部。	鍋部内面刷毛目後ナデ。脚部はケズリ後ナデ。	土師質。外面スス付着。
11	鍋			15.3	脚部。	脚部はケズリ後ナデ。	土師質。
12	甕？				胴部。	外面格子目状の叩き痕（一辺３㎜）内面ヨコナデ。	土師質。赤褐色（２次焼成か）
13	甕？				胴部。	外面格子目状の叩き痕（一辺３㎜）内面ヨコナデ。	土師質。赤褐色（２次焼成か）
14	鉢				口縁大きく外傾。	外面格子目状の叩き痕？内面刷毛目後ナデ。	土師質。焼成不良。
15	鉢？				口縁部外傾または直口。	外面縦方向の刷毛目。内面縦横の刷毛目。	土師質。胎土細かい。
16	白磁碗	14.2			玉縁口縁。		太宰府分類Ⅳ１類。12世紀。
17	白磁碗		5.8			底部外面無釉。	太宰府分類Ⅸ類。13世紀前半。
18	白磁碗		4.6			内外面とも全面施釉。	太宰府分類Ⅸ類。13世紀前半。
19	青磁碗				片切彫りの蓮弁。	淡緑色。	太宰府分類15類。龍泉窯系。13世紀前葉。
20	青磁碗				片切彫りの蓮弁。	淡緑色。	太宰府分類15類。龍泉窯系。13世紀前葉。
21	青磁碗				口縁わずかに外反。	濃緑色。	龍泉窯系。12世紀後半。
22	青磁碗			5.8程度	内面に花文。	灰緑色。	太宰府分類12a類。龍泉窯系。12世紀後半。
23	磁器碗				口縁外反。内反面に直線的な文様。	文様不鮮明（２次焼成か）。	17世紀？肥前系か？
24	土錘	長さ５	最大径1.3	孔径0.5			土師質。
25	土錘	長さ3.8＋α	最大径1.2	孔径0.5			土師質。
26	石製品	長さ3.2	幅2.9＋α	厚さ0.6	方形の薄い板状。	側面に研磨痕。	石帯未製品か？
27	鉢			８程度	口縁大きく開く。	外面刷毛目。内面横方向の刷毛目後、縦方向の刷毛目（摺目か？）。	瓦質。防長系。
28	陶器壷	10.2			直口。端部やや外反。肩は強く張る。	肩部刷毛目後ナデ。内面刷毛目。	外面に赤茶褐色の釉。
29	陶器壷	11.8	14.8	24.4	直口。端部やや外反。肩は強く張る。	外面刷毛目後ナデ。内面刷毛目（底部付近はその後ナデ）。底部との間には指押圧痕。	口縁部に黄褐色の自然釉。黄茶色。
30	石鍋	25	12.8＋α	10.1＋α	口縁端部近くに断面台形の突帯。	内面ていねいな磨き。	滑石製。内面使用痕顕著（非常に滑らか）。外面スス厚く付着。13世紀。

遺跡周辺の地形

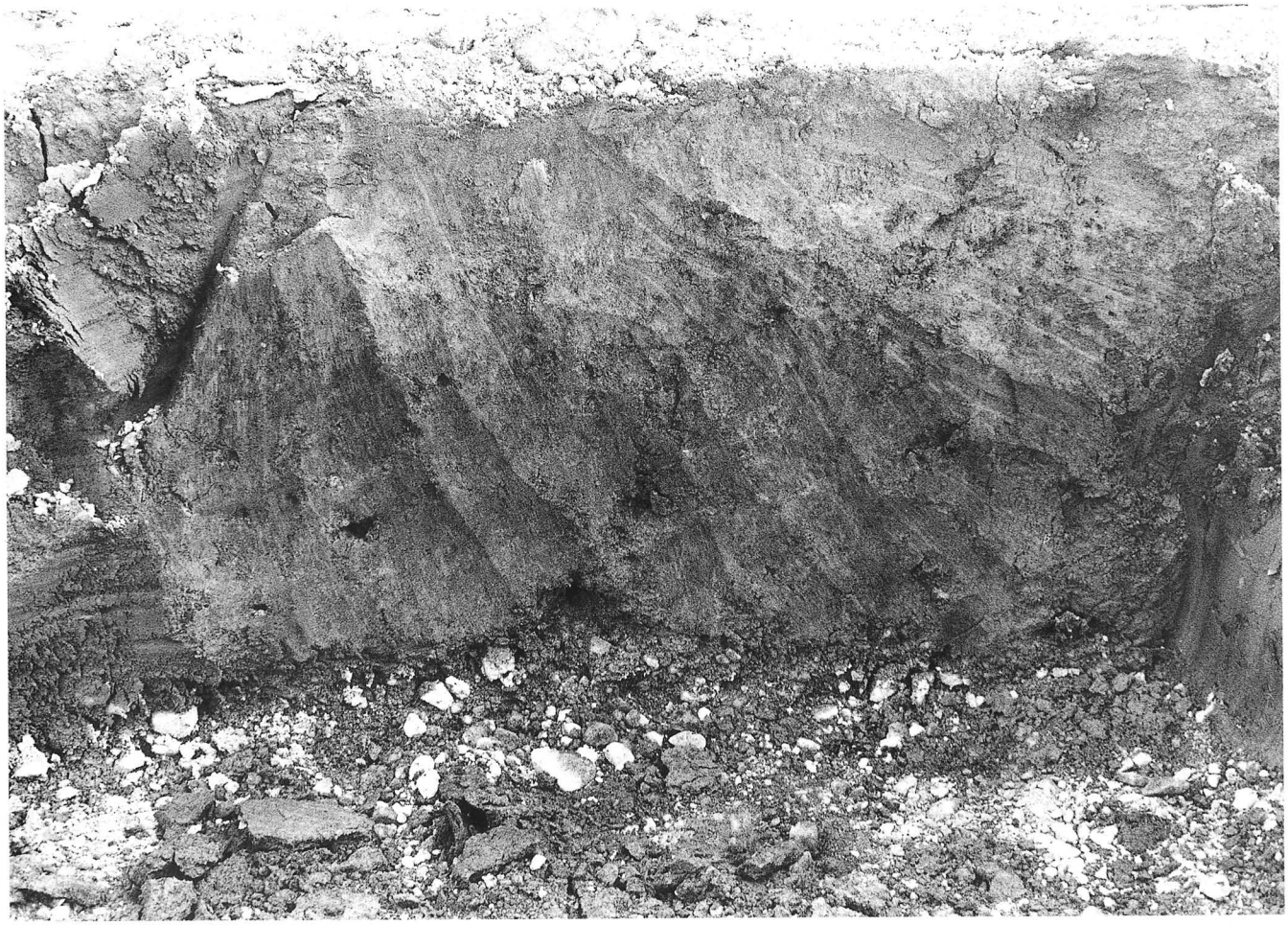
図版 2

大畑遺跡近景

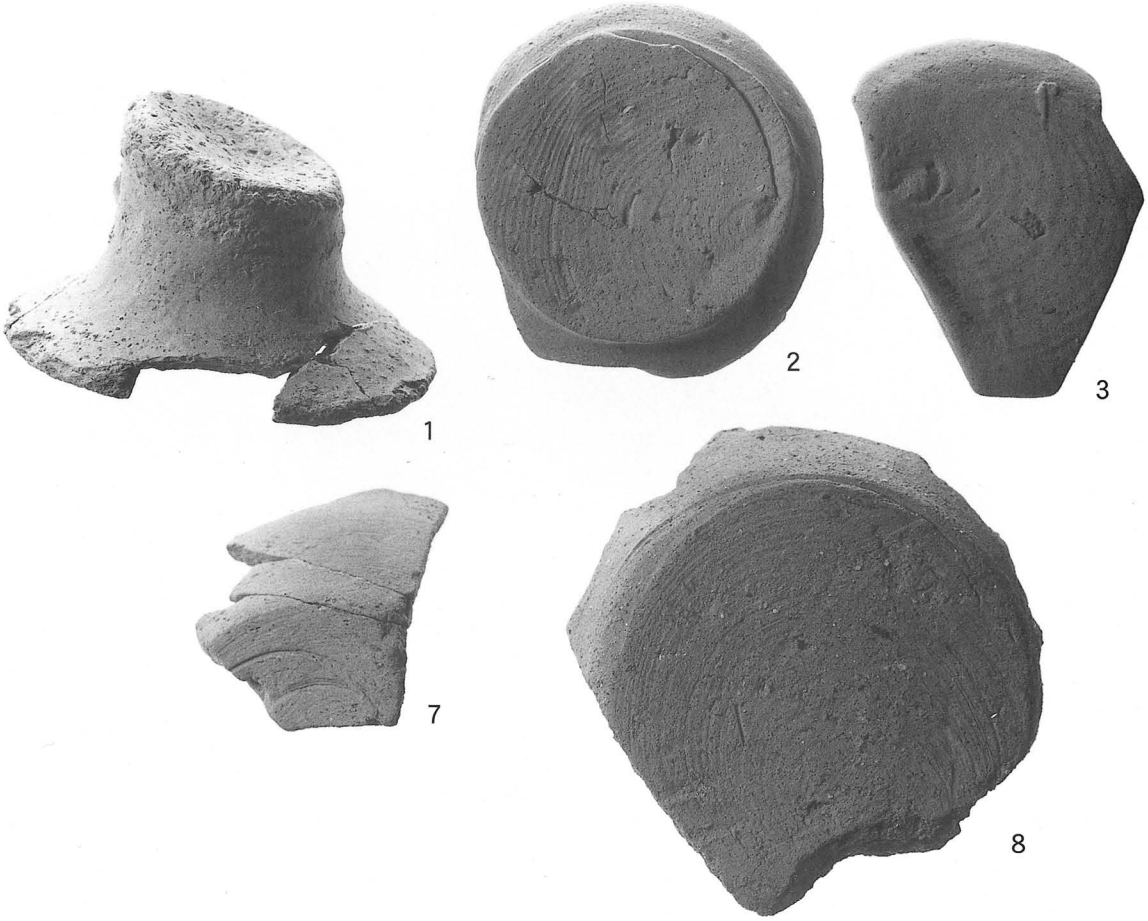
1 区完掘状況



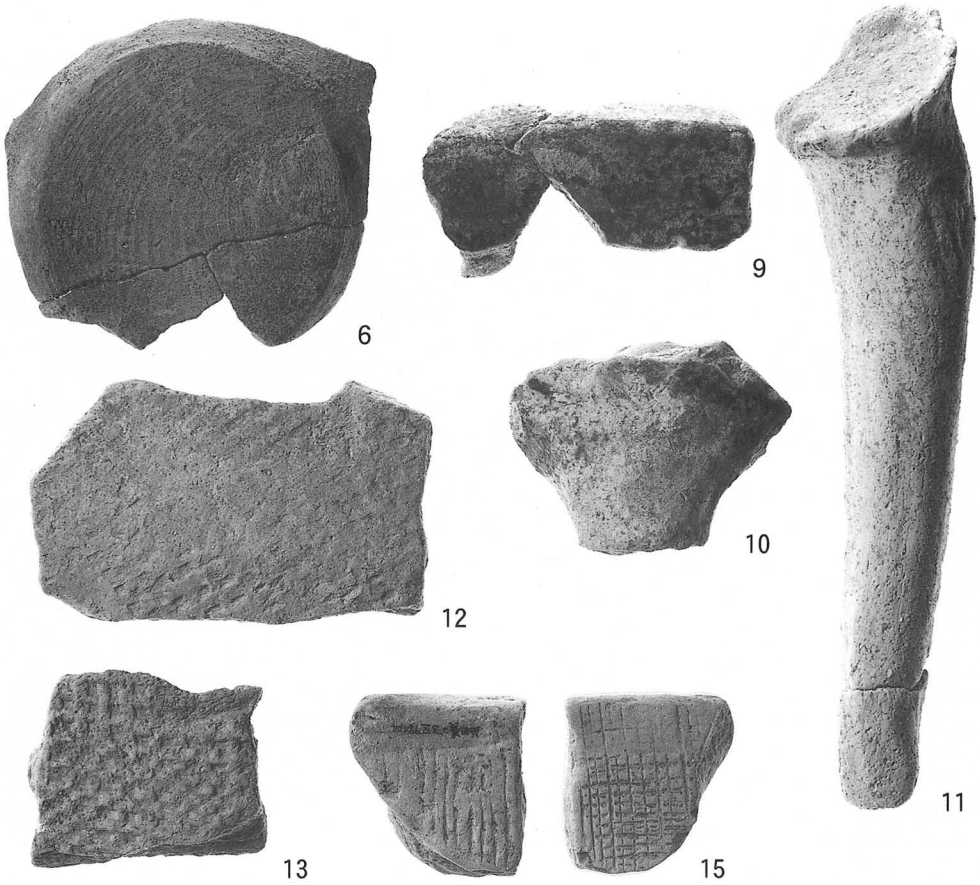
3 区完掘状況



土層堆積状況

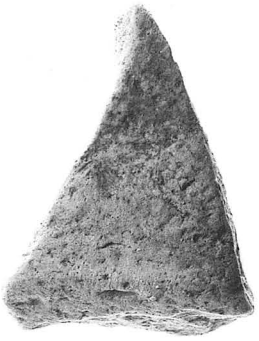


出土遺物（弥生土器・土師質土器）

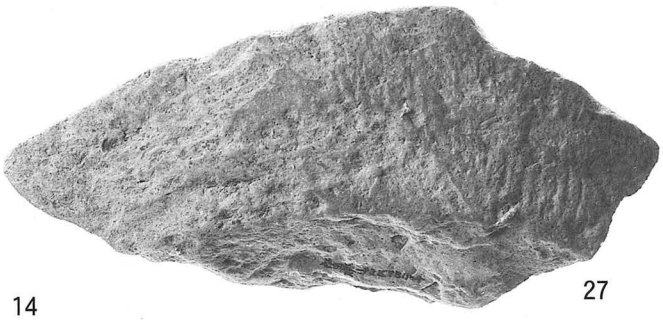


出土遺物（土師質土器・瓦質土器）

鉢（表）

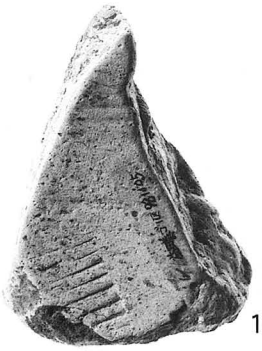


14



27

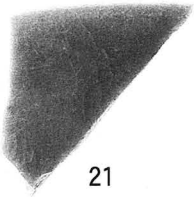
鉢（内面）



14

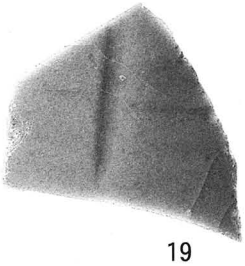
27

青磁



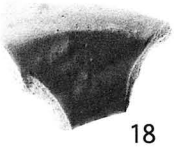
21

22



19

20



18

16

17

23

白磁・肥前系磁器

24

25

26

土錘・石製品

図版 6

陶器壷

28

石鍋

30

陶器壷

29

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおはたいせき			
書　　名	大畑遺跡発掘調査報告書			
副 書 名	島根県立益田養護学校建設予定地内			
編 著 者	柳浦俊一			
編集機関	島根県教育委員会			
同所在地	島根県松江市殿町１番地　（☎0852－22－5880）			
発行年月日	1999年３月			
（ふりがな） 所有遺跡名	所在地	市町村コード	調査期間	調査面積
大畑（おおはた）遺跡	島根県益田市横田町		1998年９月	500㎡
調査原因	島根県立益田養護学校建設工事に伴う発掘調査			
種　　別	主な時代	主な遺物		
包含層	鎌倉時代	白磁、青磁、土師器、陶器		

島根県立益田養護学校建設に伴う
大畑遺跡発掘調査報告書

1999年３月

発　行　島根県教育委員会
〒690-8502 松江市殿町１番地
TEL 0852－22－5880

印　刷　有限会社 黒潮社
松江市向島町182-3